

京都府農林水産ビジョン（仮称）検討委員会（第1回）議事要旨

1 日 時

平成 30 年 9 月 27 日（木）9：30～11：30

2 場 所

ホテルルビノ京都堀川 2階 「ひえいの間」

3 概 要

●京都府開会あいさつ

来年の秋に京都府の新しいビジョン（総合計画）の策定を検討している。非常に大きなテーマの1つに農林水産業があり、これらをはじめ京都の産業をどうしていくのかを考えていかなければならない。課題がたくさんあるのはどの産業・分野でも同じ。課題を解決するためにできるだけ前向きに1つ1つ取り組み、府民の皆様が喜んでもらえるようなプランにしていきたい。

数年前、農林水産部と商工労働観光部で和食文化のユネスコ無形文化遺産に向けて取り組んだ。当時、料理学校で和食の志望者が外国料理と比べて少ないことに、京都の和食関係者は危機感を持っていたが、ユネスコの登録が大きな契機・原動力となっている。やる気を持ってチャレンジできるような状況でないと新しい力が中々入ってこない。

行政が想定していない、理解していないことが起こることによってイノベーションが起こる。行政主体ではなく、官民合同で一緒に汗をかいていく。現状・課題の重みも忘れてはいけませんが、一方で若い人が夢を持てるようなビジョンにしたい。

●「農林水産京カプラン」の進捗状況、京都府の農林水産業・農山漁村の現状

農業就業人口について、就業者数そのものが減っている中で、全体だけでなく中身を見る必要がある。元気な若者が京都府の農業に入ってきているという印象があり、また、他府県に比べて離職が少ないように感じている。年齢別新規就業者数の精査や離農するケースの原因分析もしてフォローできるような施策を検討することが必要である。

農業就業人口について、60歳前後で就農して80歳前後でリタイヤしているケースも多い。60歳前後の就業者数を増やせば、20年ほどは就業できるので、この年齢階層を増やす取組を重点的に進めるのも1つの考え方ではないか。

また、移住促進に向けたパッケージ支援はとても良い取組。その結果として移住者数の目標達成等の成果につながったのではないか。

●自由討議（農林水産業・農山漁村の将来像を描く上での大切にすべき視点等）

一般の消費者は、京都府の農林水産業がこれだけ頑張っているということを知らない人も多いと思う。店の販売においても昨年からの取扱いを始めた京都の水産物など、客の反応は上々だが、一方で現場の取組、あるいは努力されている方々の姿を私たちもうまく伝えられていない。京都府とも協力しながら生産者と消費者をつなぐ立場にならないといけないうと強く感じた。

京都府は非常に地域の個性が強く、府の施策として具体化するに当たり、その地域性をどこまで政策に落とし込むのか。きめ細やかにしすぎると行政コストがかかり、画一的では不適切。知恵の出どころとを感じる。

「地産地消」という言葉も学校給食の中で地元の食材を使う「食育の日」などの取組により京都府では十分定着してきた。「地消」の原則は持ちつつも、地域ブランド化を進め、次のステップとして輸出も含めて考えていくべきではないか。

また、農業を応援したいがどうすればいいかわからない非農家の方々も多くいる中で、そういった人たちをいかに巻き込んでいくか、そのための新しい農村組織づくりが必要ではないか。

「京都らしさ」は、歴史だけではなく、「つながり（ネットワーク）」だと思う。周辺への配慮も含め集落同士のつながりを大切にしている意識がある。京都でレストランを営んでいる、ある外国人も同様の「つながり」を意識して京野菜のメニュー開発を行っている。「幸せなき経済」ではなくて、こうした集落のつながりを維持していくことを旨として、個人プレー的な農業ビジネスだけではなく、集落全体で持続可能な農村ビジネスを進めることが重要だが、マネジメント、マーケット開拓、デザイン等、集落のリソースだけでは不得手な分野の支援や農林水産業以外の産業も考える必要がある。

京都の強みはブランド力のみならず、1200年の歴史、様々な自然環境をはじめとした変化に対応し続け、持続できていること。今後も社会の変化や環境・生態の変化にきちんと対応できる京都府であることが土台のひとつ。常に新しいこと、アイデアが入り続けて京都があり、変わり続けることが京都府の魅力。その上で、環境問題と農林水産業あるいは農村集落の問題を一緒に考えて取り組んでいくことが必要で、私たちの学会では「ネクサスアプローチ」と呼んでいるが、切り離さずまとめて考える視点が面白い。例えば、近隣府県との連携を考えることもよいのではないかと。また、海外の事例の情報もよく参考にされたい。

●各回のテーマについて

売れるものだけを作り、自分たちが食べないものを作ることは「京都らしさ」とは相いれないことに留意が必要。ブランド力のある京野菜もそういうものであって、だからこそ横展開されるのだろう。

京都府は森林が多い一方、現場で森林を整備している担い手が見えにくい印象がある。林業は、公共性の高い分野だが、森林関連の担い手をどう育成するのかなど、担い手、経営体育成・確保をテーマにすべき。

京都府では養殖業が進んでいないようにみられがちだが、養殖している魚種の違いが大きい。岩がきをはじめ品質が良い水産物のブランド化などを強化する必要。

生物多様性保全や気候変動などの要素・視点も盛り込んでどうか。

大学と県が連携して現場で行う人材育成の取組などにより、定住・移住が進んだ事例もある。大学や他の機関との連携も進められると良い。

ICT 技術については農林水産物の生産の効率化だけでなく、集落・コミュニティづくりなど、幅広い場面での活用を検討してほしい。

会社で高校生に販売体験を行ってもらっている。農林水産業が若者から選ばれる職業になるためには、就農直前だけでなく、学生の頃からその職業に対する思いを醸成していくことが必要だと実感している。

目標設定に当たっては、数字だけにとらわれすぎず、その中身を精査することに留意すべき。また、「農林水産京カプラン」の進捗管理については、フローとストックが混在しており、特にストックは工夫すべきではないか。

●京都府総括

府内民間の中央研究所という秘密の中核でも、コワーキングスペースが作られるなど、他の機関・組織の力を借りなければ物事が進まない状況。「オープンイノベーション」が世の中を変える時代はすぐ目の前まで来ている。その要点の第1は欠点を述べるのではなく長所を伸ばすこと。「農山漁村の問題」ではなく、「農山漁村の魅力をどう引き出すか」。イノベーションは、革新だけではなくマーケットを生むというところまでいかないと解決しないし、そのためには長所を伸ばすことを考えなければならない。

今後の本委員会での議論はやむなく「業」ごとに行うが、個々のコミュニティは山や海、川があり、産業で区分されているわけではない。京都でうまくいっているところは、分野横断的な連携が非常にうまくいっており、横のつながりがあるということ。常に分野横断を考えて議論していただきたい。また、府庁でも環境部がビジョンを検討しており、大きなテーマに「生物多様性の保持」がある。生物多様性は、「里山」のものであり、人間の生活も関係している。農林水産業の分野の中で環境や観光も絡めてどんどん議論していくと他府県では得られないようなビジョンになる。他府県との連携の仕組みとしては、関西広域連合もあるが、多様な議論を出していただくと深みも出てくるので、そのような観点で新たな知恵を頂きたい。

●京都府閉会あいさつ

2回目以降、現場職員とも議論を深め、京都の強み、良いところを踏まえて御提示したい。次代の若い方々などにどういった未来を提示し、そして消費者・生産者とどう進んでいったら良いのか。来年の秋まで長丁場になるが、中間案の取りまとめに向けて、より一層の議論・検討をお願いしたい。